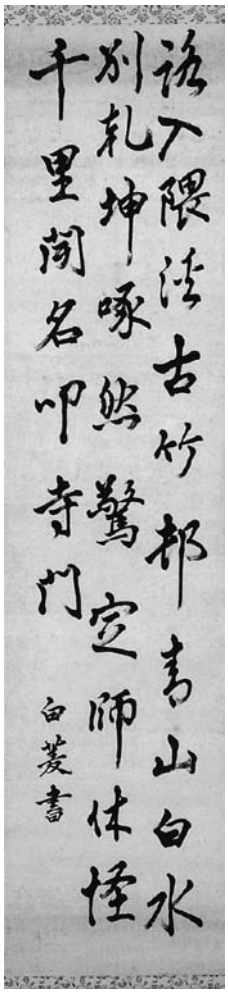
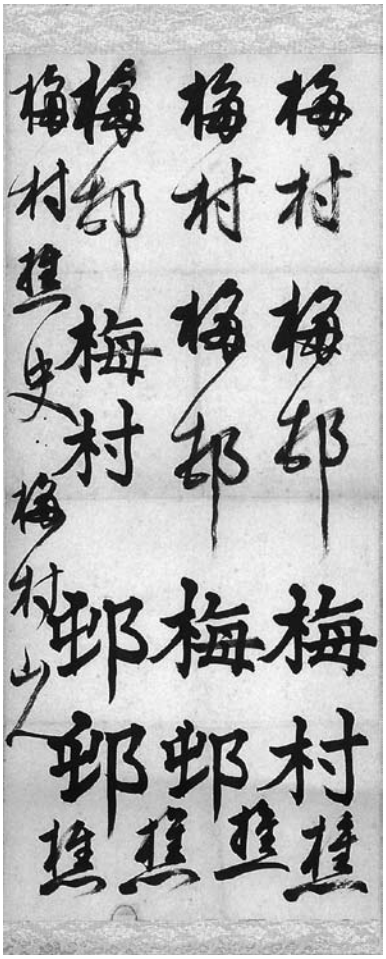
川崎白雲作品集より（1）

川﨑　白雲　先生

1．路入隅渓　一九二六（大正一五）年・一七歳



2．梅村雅号拝受　一九二七（昭和2）年・一八歳



注 (1) 高知師範に入学、入寮（白菱舎）夢中で書きまくっていた頃のもの。
(2) 川谷横雲先生から雅号を戴く。出身の「鏡村梅ノ木」から梅村。
手本か本人自筆か確認していないが…。

書美へのいざない

北川　修久

白雲先生、私はもうすぐ六十歳・還暦です。書の芸術とは何かを問うことの活動に全力を尽くしています。書の筆意を、古典からつかみ出し空間で造形にしようとする新しい書美の象（かたち）に懸命です。書を立体で造形し始めて十年近くになりました。書の芸術性・筆意は、書人が主張できる唯一の自覚なのではないでしょうか。書は、彫刻でもあり音楽でもあるとした師・手島右卿先生を紹介していただき四十年が過ぎました。右卿先生には、紙面は余白ではなく「空間」である。作品の文字は「立たなければいけない」ということをよく聞かれました。白雲先生「書が三次元で自立！」とした古典は二年前です。先生の息子（直和）さんの嫁（私の姉靖子）さんは、今年設立した一般社団法人立体象書研究会の会員になってくれました。一歩一歩ですが、書の美を求めて歩んでいます。いまも、昭和四十五年五月に杉並・永福町の手島先生宅に初めて伺った日のこと、書の世界に導いて下さったことは忘れてはいません。白雲先生、高知大学では師範大学当時と変わらないのは、正門近くの梅檀だそうです。昭和二十年頃ですか、先生の官舎生活でもあった構内で、東住吉区・中野のご自宅、信貴山のアトリエで「右卿先生の言葉はどんなことでもメモするように」と仰っていたこと等、四十年前のことをいろいろ思い出しています。書に携わること、白雲先生に紹介していただいた書の美の世界に、深く感謝しております。

川崎白雲作品集より（2）

3. 楠公碑拓本

一九四三（昭和18）年・三四歳

朱文「筆と気象ト大、埃ッテ、観者ヲシテ、彌志氣ノ高揚ヲ覚エシム」翠軒

注　撰文大野酇毅先生は高知県出身。

4. 柳と蛙

一九四五（昭和20）年・三六歳

絵・古城戸　優
書・川崎　梅邨

注　古城戸優先生、第二師範絵画の先生。

川崎　白雲　先生

白雲先生と私

大野　祥雲

川崎白雲先生に初めてお会いしたのは、先生が鏡村（当時は土佐郡鏡村）で過ごされていた時でした。授業の「書の鑑賞」の一環として、学生たちと共に完成して間も無い「ギャラリー白雲」へ伺いました。

卒寿を前にした先生は、清楚にして気品があり、鏡の自然にどっぷりとひたられた気さくな方でした。それが学書の話になると毅然とした態度でお話は尽きません。また、ご自身の作品については、素材、筆、墨、紙など一作一作、慈愛あふれるお話で一同、心のあたたまる思いで拝聴いたしました。

その後、川崎白雲、松岡雲峰書展とその門流展が、恩地春洋先生のお世話で開催されました。私自身そのお手伝いをさせていただくなど、白雲先生の作品を見せていただく機会が多くなり、感じたことを簡単に書かせていただきます。

一つ目は書風です。壮、中、晩年と変遷はしていますが、書に対する熱意は溢れんばかりのものがあります。中でも壮年期は菘翁、横雲風を根底とし、梅村（白雲）風での書作です。今日的で新しい書といわれる作品も数多くあります。二つ目は生涯に渡り臨書を重んじ、先人の技法を摂取されたことは資料からも読み取れます。綿密できめ細やかな風信帖の臨書を見ると、その的確さに驚かされます。三つ目は晩年の作品です。古典から完全に脱化。白雲独自の世界で「作品作り」を示唆。この精神は今後、脈々と生き続け、新しい世代にも受け継がれていくことでしょう。

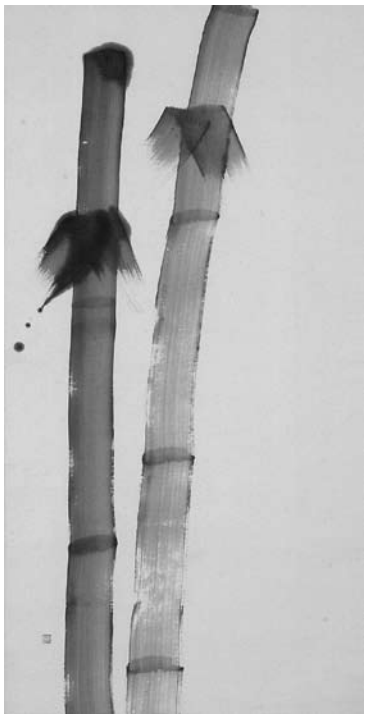
川崎白雲作品集より（3）

川崎　白雲　先生

5. 清渓花落後　長日鳥啼中　一九五〇（昭和25）年代

97×17

6. 竹



135×70

「新書芸」と称して、墨や紙や筆などで、新しい書を模索した。

第一回硬筆書道展

谷脇　梅翠

終戦後、昭和二十一年春に池田師範学校から、郷里の高知師範学校男子部の書道教官として赴任された川崎先生は、同時に師範学校本科に入学した岡田米峰、恩地春洋、小島白洲、木原江村、谷脇梅翠、等の書道部員を中心としたグループと共に、教育課程の正課から除外された毛筆習字復活を願い、日曜日や長期休暇を利用して、小中学生を対象に、各地で講習会を開催しました。好評を受けることによって、保護者の理解、協力を得ながら、競書誌「筆遊」を発行することもできました。先生の決断力の効果でした。

テレビのない時代に、日本書道文化の伝統の美を求めて、硯に清らかな水を入れ、静かに墨をする時間はどこかに気品があり、心の洗われる尊いものでした。

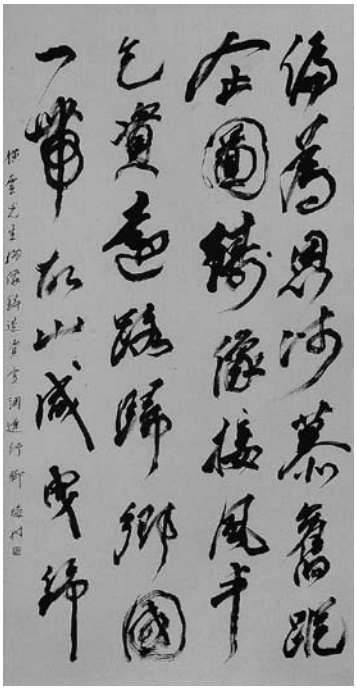
全国で最初の行事と思われる高知県小中学生の硬筆書道展を開催したのも、先生の決断による画期的なすばらしいものでした。

先生は厳しさの中に、やさしさを持っておられました。競書誌に肉筆手本をはさんで、配ることを決めると、私達に百枚ほどの手本作りを依頼し、その中から良い作の二十枚ほどを合格とし、残りは手本として採用しませんでした。私達は練習となり上達しました。

物資欠乏の時に、男子学生寮の責任者であられた先生は、遠く離れた郷里から大八車を全身で引き、奥さんが車の後押しをして、寮の炊事や、風呂に必要な薪を運んでいました。

土佐の方言「いごっそう」の表れです。

川崎白雲作品集より（4）



7. 偏為恩師　一九五五年頃

6. 石　一九六〇年代

川崎　白雲　先生

注(7)恩師、川谷横雲先生の胸像を造るために、二ヶ月にわたって故郷の高知県に帰省。有志、友人の家を行脚した。この胸像は高知市の高野寺の庭にあり、元の塑像は鏡の〝ギャラリー白雲〟にある。

白雲の書は鏡の自然から

刈谷　叔子

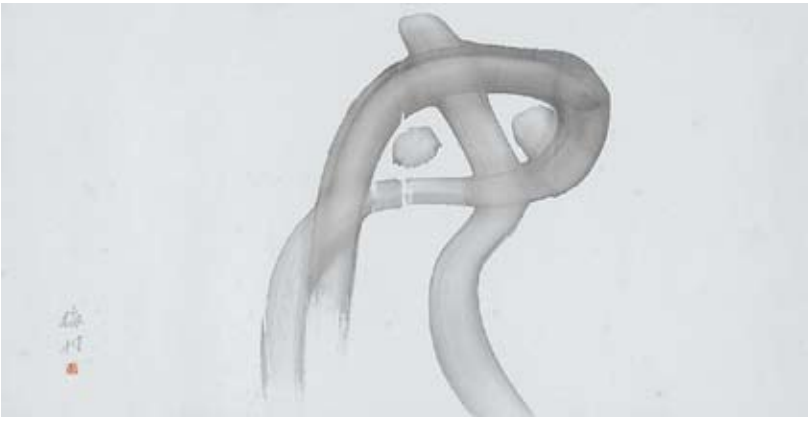
義父・伊藤神谷を自宅で見送り、半世紀住した世田谷の家に山と残された遺作や遺品の整理に数ヵ月費やし、やっと翌年家を新しく変え、心身共に癒しておりました折、「白雲・神谷遺作展」を開催していただきました。

私自身、白雲先生をあまり存じあげておりませんでしたので、展示の作品より先生のお人柄を知り、なんとも心の柔らかくなる感を受けました。ご家族の方々ともお話の機会に恵まれ、先生の過ごされた道々をお聞き出来ました。後日、帰高の際、鏡村の白雲ギャラリーで、沢山の墨跡に触れ、改めて書家の線と偉大なお仕事を残されたことを知りました。素朴な山川に育まれた先生の作品群が、故郷の自然から生まれたと実感いたしました。いつでも会うことの出来る里山の美術館、ゆっくりと訪れたいと思います。書を「下駄ばきの庶民に見てほしい。」と言っていました神谷の言葉が忘れられません。人の心に響く、白雲先生の「母」や「旦」を見せていただけた時は、感激しました。白雲先生どうぞ安らかに・有難うございました。

川崎白雲作品集より（5）

9．全山是錦

注 (9) 淡墨に朱を混ぜて秋の紅葉の美しさを表現した。
今までの書の常識を破った絵画的な試行。



10．母

注 (10)「母」の造形は、試行作品が他に数点残っている。
肉感的な線は全く絵画的なもの。

川﨑　白雲　先生

川﨑先生との出会いは私の宝

濵田　尚川

川﨑先生との出会いによって書の魅力にとりつかれる。何もかもびっくりすることばかりであった。先ず淡墨で書くことに驚き、新鮮さも覚え、黄庭経の臨書だった。翠軒調の淡墨で伸びやかな美しさに引かれた。でも簡単に出来るはずはない。先生の書かれるリズムをジッと見せていただきながら練習、練習…。毎日のクラブの時間も書き込みに必死、添削して下さる先生の真剣さに引き込まれ夢中になった。行書は桂水園の臨書、ねばりのある温かい深い線でこれまた難関。形ばかりうまく書きかすれたら補筆を加え活字のような字になっていた私にとっては全く別世界であった。

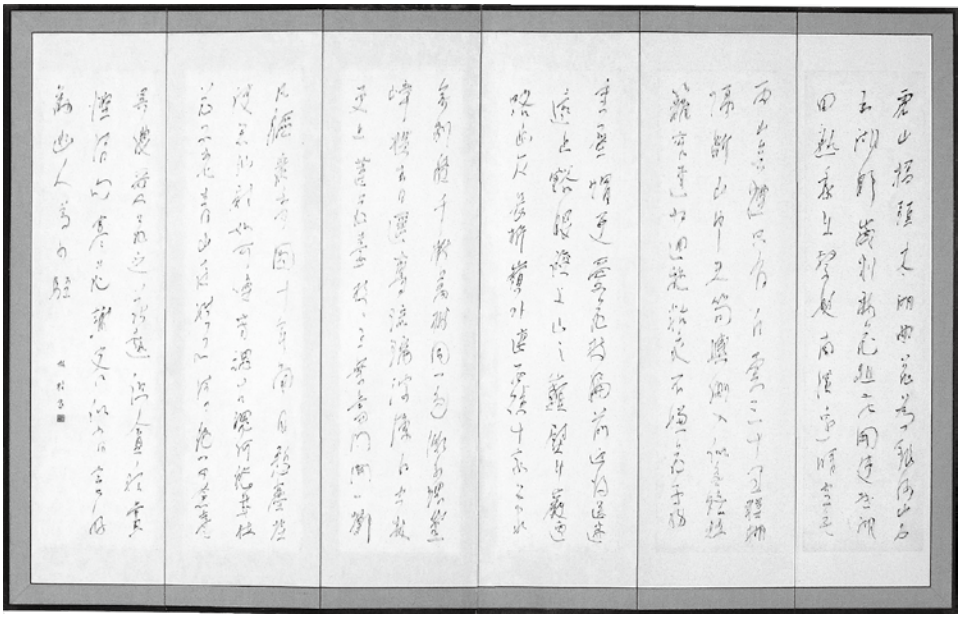
書は線質に眼を向け幅を広くしていくことその為には違った沢山の古典から学ぶことが必要である。つまり「書は線が命だ」と教わり身ぶるいした。うまい字じゃなかったか…。

ある時作品をさげて大泉君と二人で先生宅（構内）を尋ねた時のこと、臨書に没頭されている姿に手前で足が止まった。「オイ先生やりゆうぞ！オイすごいぞ、先生は左の古典を見つめ、右手はそのまま動きゆうぞ。オラあ書いている方を大方見よるがねや！臨書は古典からは眼を離さず書く方はチラッと見るだけで運筆する、そこまでいかんとネヤ。」

この日はいつも指導下さっていることの「お手本」を拝見し感激した。改めて先生の偉大さに感服した。先生は「指導者は常に生徒の倍以上の努力をしなければダメ」とおっしゃられた。今日の先生の姿をお手本にするぞ！

（予科3年頃の思い出）

川崎白雲作品集より（6）



11．虎山橋　1960年・51歳　*(135×35.6)×6*

注　これは、白雲先生が、個人的に、預けた？のか、進呈したか不明だが、この作品集を編集するに当たって改めて目にしたものである。横雲調から抜けて調子の高い、半折６曲一雙である。田宮先生の序文にも、これを代表作のひとつとして押しておられる。詩については、作者名不明、ご存知の方はご教示を乞う。

川﨑　白雲　先生

肉筆手本

木原　江村

昭和二十三、四年のことである。私は師範学校の最終学年であった。当時は川﨑梅村先生の雅号であった。

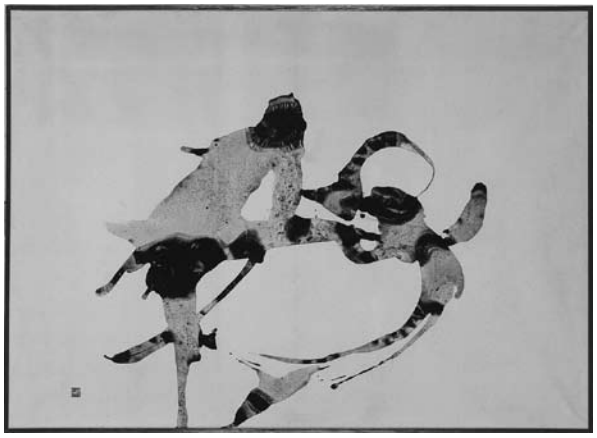
先生は書道を広めるために肉筆手本を添えガリ版刷りの競書誌を出していた。私達書道を専攻している生徒は、そのお手伝いをしたことがある。私は半紙タテ半分に三字の文字の手本を三百枚位書くことであった。同じ言葉の三百枚だからたいしたことではないとその時は思った。いざ実際に書いてみると、どうしてどうしてなかなか大変である。しかも書いた手本は先生の検閲を受けなければならない。それが実に厳しくて書き直しなどしょっちゅうであった。月に一回のことだからすぐに次の月の〆切が近づいてくる。これほどまでに手本を書くことのむずかしさを実感したことはない。提出の期日が迫った時には徹夜で書き上げ先生のご自宅へ持って行き検閲を受けたこともあった。このことは並み大抵のことではなかった。しかし、こうした経験があったればこそ現在の自分があるのだと思っている。

私は昭和二十五年に書の研究がしたくて上京した。しかし、当時の東京は給料は安いし物価は高く生活が苦しくて書の研究どころではなかった。こんな中にあっても学書を諦めることなくこつこつと出来たことは、川﨑先生より学生時代に受けた教訓が私の書に生きていたのだと思う。

川崎白雲作品集より（7）

川崎　白雲　先生

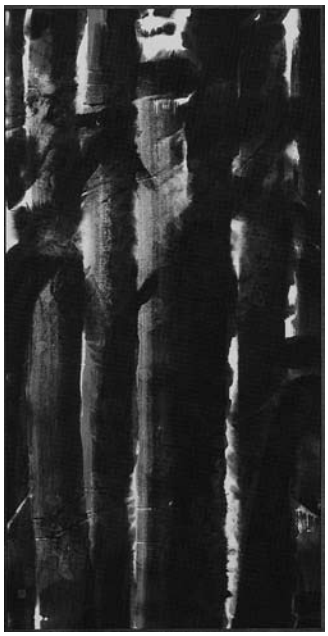
12．好（ツイスト）　一九六二年（五三歳）



80×110

注　この作品は文集「白雲先生と私」の表紙にもデザインとして使用した。
「好」は宿墨を皿に入れて、その底で墨をこぼしながら書いたもの、造形的な感覚による作品。この手法が注目され、キャバレー千扇の正面バック「千扇」を揮毫した。

13．高野山奥の院



135×70

注　「高野山奥の院」は、墨と朱の混用で深山の趣きを表現したもの。これは「木」という字の集合だが、全く絵画として見ても鑑賞できる。

便りと思い出の写真

大坪　義孝

拝啓

今年は特に蒸し暑い天候が続いております。毎日雨の憂鬱な土佐路です。長らくご無沙汰いたしておりますが、先生におかれましては益々お元気でご活躍のことと存じます。

本年八月高知での川崎白雲先生の記念展を開催される由、ご盛会を御祈りいたしたいと思います。また今回「白雲先生と私」という記念誌を発行されるとのことですが、折角お声をかけていただき感謝申し上げたいと思いますが、私も長年痛めておりました脊柱管狭窄症が悪化し近日中に手術を医師から言われておりますし、また年とともに眼も悪くなり「緑内障」で眼科医に通院している状態ですのでどうか今回はお許し願いたいと思います。

白雲先生には十五年まえから大変お世話になっておりました。白雲先生から戴いた横額の「体験」と恩地先生の「捨」を我が家の応接室に飾らしてもらい、白雲先生の数多くのご功績をたたえおおいなる遺徳を偲んでおります。

最後になりましたが白雲先生の面影を偲び泉下の平安を心からお祈りいたしております。また、恩地先生もいつまでもお元気で益々のご活躍をお祈りいたしております。

敬具

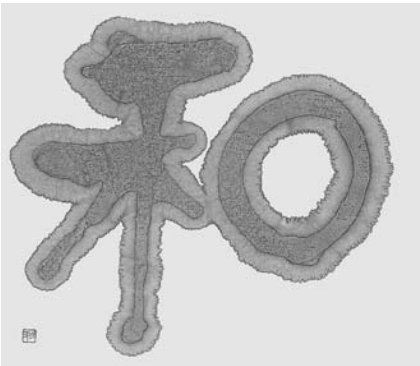
七月七日

川崎白雲作品集より（8）

14・松竹梅

135×70

15・和



45×52

注14　「松竹梅」の三字を重ね書きして全体構成とした。淡墨が明るい。

注15　「和」絵画用のケント紙に青墨にゼラチンを混ぜて線とにじみの強さが出ている。評判よく、手刷りの複製の注文があったと聞いている。額装が似合った作品だった。アメリカ巡遊の前、イーデス・ハンソンさんなど外国人や評論家柿谷華王子先生、独立の画家池島勘次郎先生と交友があった。

川﨑　白雲　先生

いただいた雅号「松琴」

故　喜多　松琴

昭和十四年高知第一高女卒業、更にもう一年通学、専科正教員の免許状を得、十五年三月終了十日程して上阪。書道担任の谷脇先生達のおすすめで、書道家文検受験を目ざして先生の師、桑田笹舟先生宅へ伯父の家より土曜日毎通いました。

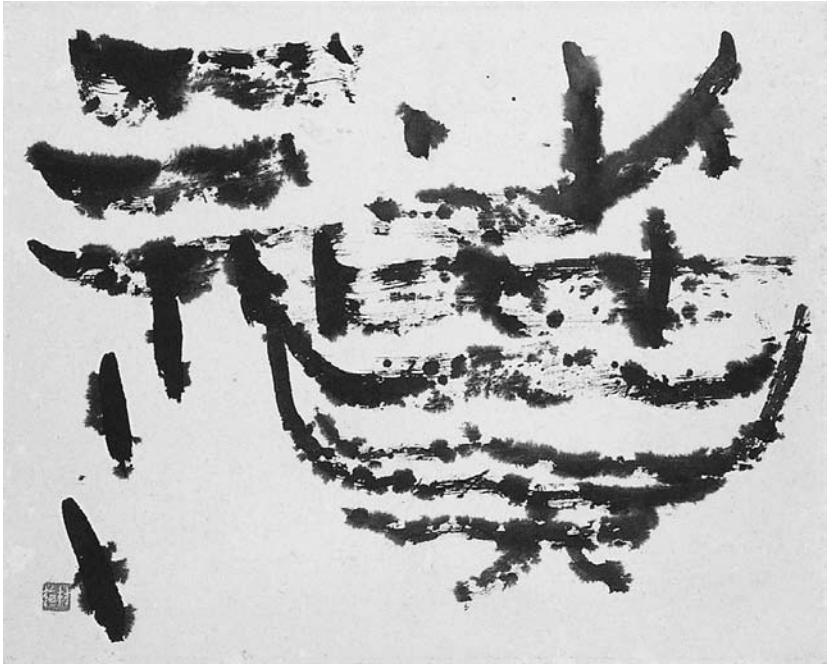
梅村先生に初めてお目にかかったのは、たしかその年の夏、甲子園でした。私の出身小学校のプールへ師範学校の水泳部の方々が毎日練習、兼指導に来られており、その中に県代表の選手になられた方が四、五名おられ応援がてら（田舎出の私はまだ甲子園を知らなかったので）行った時、ご紹介頂きました。先生も水泳がお得意だったとか…。文検の事をお話しますと漢字をご指導くださることを、お約束してくださいました。

大阪都島の方へご出張されておられ、そこで水嶋先生、中西先生にお会いしました。或時水嶋先生が「伊都内親王願文」を臨書されてこられ、梅村先生が絶賛されたことを記憶しています。遅くまでお邪魔しておりましたので、帰りは最終の地下鉄に間に合うように市電から飛び下りて中西先生と必死でよく走りました。帰宅後、よく勉強されている方々の顔が浮び二時間位は書きました。当時睡眠時間は大体四時間位。当時文検受験は、〝寝食忘れて三年〟と言われていましたが、二年半後、先生が講習会に行くつもりで、雰囲気だけでも味わってくるように言われ、正に〝盲蛇に怖じず〟の感で挑戦。まぐれで予試通過。その間水嶋、中川先生のご助言は有難かったです。梅村先生には徹夜でご指導頂いたり、本試験上京後直ちに手島先生宅に伺って、お教え頂けるようお手配下さったり、合格は偏に先生、諸先輩に恵まれたこと、感謝致しております。梅村先生からの最高の贈物は、雅号「松琴」です。大好きです。

（二〇〇九・七・二〇逝去　八十七歳）

川崎白雲作品集より（9）

16．砂漠



40×51

注　点描風の手法で砂漠の砂の質感を出そうとしたようだ。
アメリカ巡遊後の作品。

川﨑　白雲　先生

夫唱婦随

故山　柏亭

昭和三十一年小学校に奉職して以来、多田観山先生に連れられて中野駒川のお宅や中西淀蘭先生のお宅へ筆友会の競書の審査でお伺いし、恩地先生、小伏先生、山下先生といった大先輩のお仲間に入れて頂き、約十年間、現在の書家としての礎を養って頂きました。

特に指導者養成講習会では一期生として、楷書の初期から、仮名、日常文字と多岐にわたり熱心にご指導くださり、今になって思えば大変なご苦労だったんだと感謝の念でいっぱいです。

また、息子さんの吾一氏、中西庚南氏と小生の三人で筆友会の運営委員をしていたときは先生のお宅で夜遅くまで、お邪魔してましたが、その時は先生ばかりでなく、奥様もご一緒してくださり、色々とご助言や書道について、お話しくださっていた様子が今でも、くっきりと思い出されます。

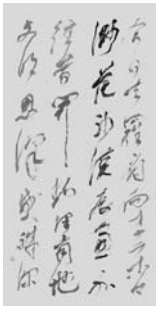
川﨑先生と奥様は常に笑顔で接してくださり、叱られたことがなく、特に奥様は先生の影のように寄り添っておられ、このように素晴らしい女性はお目にかかれないと、今だに尊敬しております。草津の白雲先生の個展では、ご夫婦共に入院されているとのことで、お逢いできませんでしたが、久子お嬢さんとお話でき、楽しいひとときを過ごすことができました。

二十歳頃にご指導頂いてから小生も今年で七十四歳と高齢者になりました。三十二歳位から先生の元を出て、他の書道グループに属し、その後水嶋山燿先生の門弟となり何とか書道の奥深さがわかりかけてきたところです。

川﨑先生の筆友会が現在では恩地先生を中心にして玄遠社となり大きく花開かせています。小生も単に字を書くだけでなく、水嶋先生の尋牛会の発展の一翼を担えるように頑張ることが、お教えを頂いたものの恩返しだと思います。川﨑白雲先生のご冥福を祈りつつ、玄遠社の益々の発展を祈念しております。

川崎白雲作品集より（10）

18. アメリカ筆の旅（54歳）



135×70　5幅対

全紙五幅対　カタカナの交じった漢詩で、アメリカ巡遊旅行の感懐をまとめた。

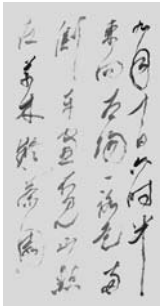
布哇風光絶天下
好風吹処椰子楽
緑庭海辺観光園
不老長寿忘労苦

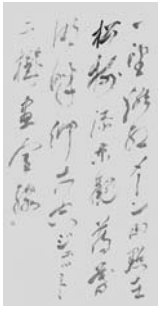
今日羅府向オクラホマ
渺茫沙漠展窓外
往昔開拓埋骨地
文明恩沢感殊深

九月十日六時半
東向太陽一路走
両側車窓不見山
点在草木疑茶園

一望燃紅メーン山
点在松樹添景観
薄暮湖畔仰大空
ジェットニ機画金線

父祖願望今茲果
各地巡遊示筆道
異郷人々依之親
人生悦楽無勝之





17. ハワイ風光　一九六三（54歳）

135×70

川﨑　白雲　先生

書の縁は風化しない

石山　攝山

小生は、昭和三十一年に大阪学芸大学（大阪教育大学の前身）を卒業して以来、四十年間教職にあり、平成八年三月に退職。その後（財）大阪市教育振興公社生涯学習推進課、放課後児童育成課に勤務しました。

書との関わりは、大学で書道部に属したのが始まりで、水嶋山耀（旧鶴山）先生にご指導を受け、卒業後、川﨑梅村先生が水嶋先生の前任で池田師範におられたご縁で、先輩の山下皓映、小伏竹村先生などのご紹介で玄遠社とのつながりができました。恩地・小島両先生をはじめ、板倉備北、岩井芳岳、佐藤雲溪先生など、玄遠社の中心になっておられる諸先生とのおつき合いが始まりました。

当時は、今はもう鬼籍に入られた中西淀蘭先生の他、現在日本女流書家の中でご活躍中の喜多松琴、和田清香、藤井青蘭、泉雪華などの諸先生、そして生涯学習推進課に勤務していた時、講師としてご活躍いただいている小林琴水さんなども若々しく、勢いのある会でした。今、環境問題のパイオニアとして頑張っているイーデス・ハンソンさんも仲間の一人で、梅村先生と一緒にアメリカへ行かれたことを思い出しています。大阪弁で気さくに話せる珍しい外国人でした。

玄遠社書展が、今も若くて新しい方々が、恩地先生を中心として今後共ますますご活躍をされ、隆盛ならんことを祈っています。

現在は、どの団体にも所属しておりませんが、隔年に、高校美術部OB会展に、毎年、同窓会展に出品しております。毎朝の自然散策の折に、俳句を吟じたり、草花・風景をスケッチして色紙に描いたり、篆刻を楽しんだり、常に前向きに生きております。